

人類のビオトープ——風景とアントロポクラシー

佐藤守弘（同志社大学）

美術史家 E・パノフスキーは、幾何学的遠近法を生み出したルネサンス期をアントロポクラシー Anthropocracy、すなわち「人間による支配」と呼んだ。人間が自らを取り巻く環境を計測＝操作可能なものとして捉えはじめたという点において、それを人新世 Anthropocene の起点のひとつと考える論者もいる。確かに狭い意味での「風景」——すなわちルネサンス以降のヨーロッパで発展した環境を表象するモード——が、遠近法による主客の分離を前提としている以上、それは人新世という枠組みと無関係ではないはずである——そう考えると「人新世の風景」という言い方自体が同語反復的なものかもしれない。本発表では、人間と自然の境界づけの原理を E・サイードの言う「心象地理 Imaginative Geography」に求めつつ、絵画、写真、庭園などの表象メディアを参照して、風景がどのように「自然」なるものを構築／定位してきたのかを辿るとともに、〈植物〉をキーワードに風景のオルタナティブを探ってみたい。

参考文献：

ジル・クレマン（2015）『[動いている庭](#)』山内朋樹訳、みすず書房

石川初（2018）『[思考としてのランドスケープ 地上学への誘い——歩くこと、見つけること、育てること](#)』LIXIL 出版

Philipp Lepenies（2018）, [The Anthropocene: The Invention of Linear Perspective as a Decisive Moment in the Emergence of a Geological Age of Mankind](#), *European Review*, Vol. 26, No. 4, 583-599.

西村清和編（2012）『[日常性の環境美学](#)』勁草書房

エルヴィン・パノフスキー（2009）『[〈象徴形式〉としての遠近法](#)』木田元監修、川戸れい子、上村清雄訳、筑摩書房

エドワード・W・サイード（1993）『[オリエンタリズム](#)』板垣雄三、杉田英明監修、今沢紀子訳、平凡社

篠原雅武（2018）『[人新世の哲学——思弁的實在論以後の「人間の条件」](#)』人文書院